

セミナー2

神話・民話・逸話から『ヴェニス商人』を読み直す

コーディネイター：鶴田 学（福岡大学准教授）

メンバー： 小林 潤司（鹿児島国際大学教授）

徳見 道夫（九州大学教授）

廣田 篤彦（京都大学准教授）

（要旨）

このセミナーでは当初より設定していた神話・民話・逸話に加えて、歴史・宗教・高利貸しといったトピックを交えて、メンバー間で双方向的な議論を積み重ねてきた。セミナーの大きな柱の一つである神話を担当した廣田篤彦氏は、緻密かつ大胆な議論で先陣を切り、『ヴェニス商人』の背景としての黄金の羊毛伝説の重要性、とりわけ「イアソンの一人としてのアントーニオ」について丁寧に論じた。二番手の徳見道夫氏は、C. マーロウの『マルタ島のユダヤ人』やF. ベーコンのエッセイを経由して、幅広い角度からシャイロックという登場人物の特異性を考察した。次に鶴田学は、劇の材源といわれる複数の民話と当時の説教を読み直し、『ヴェニス商人』のなかで民話と説教とが奇妙な形で融合していることを明らかにした。四番目に小林潤司氏は、『ヴェニス商人』に先行する演劇『ロンドンの三人の貴婦人』を詳細に分析し、近代の資本主義経済社会を予見する『三人の貴婦人』のドラマトゥルギーを確認した。以下、メンバーそれぞれによる発言の要約である。

*

・廣田 篤彦 「黄金の羊毛伝説とアントーニオ」

本ペーパーでは、神話という側面から『ヴェニス商人』を読み直す試みとして、黄金の羊毛伝説とアントーニオとの関係を考察した。黄金の羊毛伝説を『ヴェニス商人』のサブ・テキストとして想定するとき、アントーニオは、以下の二つの点でこの間テキスト性を支える重要な要素となっていると思われる。

劇の冒頭近くで、アントーニオの持ち船が‘argosies’ (1.1.8)という、アルゴー号を連想させる語で言及されることでイアソンとアントーニオとの関係が浮かび上がる。さらに3幕2場で、アントーニオの持ち船がすべて失われたという報せをベルモントに持ってきたサレーリオは、アントーニオを失敗したイアソンとして語っている(240)。初期近代において黄金の羊毛は交易による利益の比喩となっていたが、アントーニオもまた、これを求めるイアソンの一人なのである。特に新大陸の貴金属とイングランドの羊毛がそれぞれ伝説の黄金の羊毛にたとえられていたことから、この関係はアントーニオの交易先としてメキシコとイングランドが言及されることでとりわけ妥当なものとなる。

一方、裁判の場面でアントーニオは自らを仔羊にたとえる(4.1.73)。この比喩は生贄

のイメージを通じて彼とイエスとを結びつけるが、*Ovide Moralisé* ではイエスの肉体が黄金の羊毛にたとえられており、ここでもアントーニオは黄金の羊毛を巡る比喻の体系に取り込まれることになる。さらにアントーニオは、自らを「病んだ去勢牡羊」(113)として言及するが、この自己規定は、ジェシカによるメデアへの言及(5.1.12-14)の材源と想定されている、ゴールディング訳『変身物語』巻7において、メデアが「生まれたての仔羊」に若返らせる「群れで一番老いた牡羊」を想起させる。やはり自らをイアソンにたとえるバッサーニオの妻ポーシャによって命を救われるアントーニオは、イアソンの妻メデアによって再生される老いた牡羊へとその姿を変えていると考えられる。

・徳見 道夫 「『ヴェニス商人』のシャイロックと作品構成」

『ヴェニス商人』を読んで最初に印象に残る事象としては、シャイロックの異様な描写である。1600年の初本版の中には、*The comical Histories of the Merchant of Venice* と書いてあるから、出版社は(あるいはシェイクスピアも)喜劇としてこの劇を分類していることになる。(当時のジャンル分けは今日とは違うが、それはここでは置いておく)『ヴェニス商人』という題目を聞いて、アントーニオと思う人は少なく、シャイロックだと思える人が多いという事実は、シャイロックの印象がそれほど強いということである。シェイクスピアはシャイロックを喜劇の枠組みの範疇には入れなかった。ジャンルを犠牲にしても、ユダヤ人シャイロックを描きたかったのであろう。

同時代にユダヤ人を描いたマーロウの『マルタ島のユダヤ人』は、シャイロックほど作品の均衡を崩していない。マキアベリの弟子であるバラバスは悪事を楽しんでいるが、我々人類の歴史に影響を及ぼすことはなかった。散文と短い言葉で、真実の叫びをあげるシャイロックは、現実のユダヤ人に影響を及ぼすほどの磁場を作品の中で築いていたのである。現実のユダヤ人でシャイロックの描写に影響を受けていないものはいないであろう。ユダヤ人はシャイロックという性格範疇に閉じ込められて人から解釈される。単なる喜劇的人物であれば、そのようなことはなかったが、三つの箱選び、人肉裁判というおとぎ話を背景にして、虐げられたユダヤ人が心からの苦衷を吐き出し、果ては改宗までさせられるとなれば、シャイロックだけを見れば悲劇的人物である。

発表者のこれからの仕事は、作品内部のシャイロックが作品外部のユダヤ人にどのような影響を与えたか、また当時の作品に描かれたユダヤ人とシャイロックとバラバスはどのように違うのかを検証することであろう。今回のセミナーに参加して、ロマンス劇と歴史劇だけを研究してきた発表者に、喜劇という大きな世界を与えてもらったことに心から感謝したい。

・鶴田 学 「民話と説教の不都合な融合」

劇の主要な材源であるイタリア民話『愚か者 (イル・ペコロネ)』第4日・第1話や『ゲスタ・ロマノールム』第66話と『ヴェニス商人』との関係を再検討すること

によって、シェイクスピアが複数の民話のプロットを組み替えて己の芝居を構成した際に、当時のピューリタンの説教が影響を与えた可能性を論じた。

『愚か者』のなかには「求婚旅行の筋」、「人肉質入れ裁判の筋」に加えて裁判終了後に展開する「指輪を巡る騒動の筋」までがすでに存在している。すなわち、プロットから見た『愚か者』と『ヴェニス商人』の大きな違いは「求婚旅行の筋」における花婿選抜のルールだけ、ということになる。原話『愚か者』では、求婚者はベルモンテに住む裕福な未亡人を花嫁とするために一夜ベッドをとともにして彼女を「満足 (content)」させなければならない。劇作家は、このきわどい話を消去し、その空白を埋め合わせるために『ゲスタ・ロマノールム』に登場する「三つの箱選び」という選抜ルールを採り入れた。

しかしながら、『愚か者』に含まれる猥雑な要素は、『ヴェニス商人』の世界から完全に閉め出されたわけではない。証拠として二点。原話において未亡人が求婚者に眠り薬の入った酒を飲ませて目的の達成を阻んでいるという逸話は、『ヴェニス商人』においてはポーシャとネリッサのお喋り (1. 2. 92-96) のなかに痕跡を残している。さらに、芝居を締めくくるグラシアーノの猥雑な冗談 (5. 1. 306-7) は、『ヴェニス商人』を奔放で享樂的なイタリア民話の世界に一步引き戻している。

また、『愚か者』と『ヴェニス商人』のどちらの場合も、必要以上の富を蓄えた人物 (未亡人、シャイロック) が最後に一本取られ「満足した (content)」(MV. 4. 1. 390) と言わされる構造になっているが、このとき劇作家シェイクスピアは、強欲を諷めるヘンリー・スミスの説教「満ち足りた心の恵み (The Benefit of Contentation)」を強く意識していたに違いない。

・小林 潤司 「原ヴェニス商人としての『ロンドンの三人の貴婦人』」

『ヴェニス商人』の世界を構成しているさまざまな要素のなかから特に「ユダヤ人」、「改宗」、「高利貸し」という三つの概念が、ロバート・ウィルソンの 1580 年代の道德劇『ロンドンの三人の貴婦人』のなかでどのように取り扱われていたかを概観し、当時の観客が『ヴェニス商人』を見た時に、先行作品の記憶が、作品理解の枠組みとしてどのように機能し得たのか、その可能性を探ってみた。

『三人の貴婦人』のイタリア人商人マーカドラスと『ヴェニス商人』のアントーニオとを比較すると、一見、前者の極端な他者性の強調、トリックスター性は、後者にはまったく生かされていないように思われるが、『ヴェニス商人』では商人の他者性が薄められた分、ユダヤ人の他者性が前面に押し出されており、トリックスター的な人格はグラシアーノのキャラクターとポーシャの変装へとかたちを変えて引き継がれている。

見せかけの親切で油断させて物惜しみをしないキリスト教徒の命を狙う『ヴェニス商人』のシャイロックは、『三人の貴婦人』の副筋に登場する「親切な」ユダヤ人の金

貸しジェロントスと主筋に登場する非情なく高利貸しを合成した人物という側面を持っている。「親切的な／異教徒（キリスト教徒的）な”gentle/gentile” シャイロックはジェロントスの記憶を、アントーニオ殺害未遂は、＜高利貸し＞による＜歓待＞殺害の記憶を呼び覚ます。

『ヴェニス商人』は、『三人の貴婦人』のもつさまざまなモチーフを引き継ぎながらも、それらを巧みに変形し、作者がそれまでに自家薬籠中のものにしてきたロマンティック・コメディの世界のなかに溶かし込んでいるが、それは、『三人の貴婦人』をサブ・テキストにすることで、ロマンティックでお伽噺的な表層の下に隠蔽されているさまざまな不安を透かし見ることができるという、手のこんだ仕掛けになっているということでもあるのだ。

*

後半の議論の場では、シェイクスピアの同時代の観客による『ヴェニス商人』の受容と理解、ギリシア・ローマ神話や聖書が及ぼしたシェイクスピア演劇への少なからぬ影響、性的あるいは経済的な力関係から生じる登場人物間の競合と葛藤、M. ラドフォード監督による映画『ヴェニス商人』(2004) など、多岐にわたる関心から活発な意見交換が展開した。マイクを奪い合う白熱した議論のなかにも時折フロアから笑い声が漏れ聞こえたのは、メンバー間の「ヒューモア」が見事に調和していたからに違いない。フロアの今西雅章氏からは、示唆に富むご質問とセミナー全体に対する讃辞の言葉を賜った。セミナーの充実した議論は、『ヴェニス商人』という作品の尽きることのない豊かな読みの可能性を証明していたように思われる。最後にこの場を借りて、質疑応答まで熱心に耳を傾けて下さったフロアの方々、協会事務局、会場関係者に心よりお礼を申し上げます。

(文責 鶴田 学)



